

木の家具の魅力がつなぐ森と社会

秋田県立大学木材高度加工研究所教授 足立 幸司

1 家具づくりに見る「夢中になる力」

木材に触れる行為は、自然との関係を最も直接的に体感する手段の一つである。家具づくりは、質感、香り、加工時の手応えを五感で捉えながら形を生み出す営みであり、素材への愛着や自然への共感を育てる経験として重視されてきた。

家具を自らつくる体験は、夢中になる契機として強い力を持つ。木を削り、組み、仕上げる一連の作業には、高い集中力と判断力が必要とされる。完成した家具が生活空間に溶け込み、日々使われていく過程で、作り手の存在はその空間に刻まれる。家具づくりは、「つくること」と「生きること」が重なり合う行為であり、夢中になる要素が豊かに含まれている。

木材の特性も没入を促す要因である。時間の経過とともに変化する色や質感、深まる風合いは、使い手との関係を育む。変化をともしする素材との対話は、機能性を超えた情緒的価値を生み、長く使われることで深い愛着が形成される。木材に触れることを通して、都市に暮らす人々も自然の存在を身近に感じることができる。

各地では木材を用いたDIYや木工ワークショップが開催され、幅広い世代が木と関わる機会を得ている(写真1)。子どもにとっては創造力や自己肯定感を育てる貴重な体験となり、高齢者にとっては手を動かし成果を得ることで、生きがいや社会参加の感覚が得られる。これらの活動は個人の内面



写真1. 木工ワークショップの事例（岩手県大槌町にて）

的充足を支えるだけでなく、地域の交流や文化継承の場ともなっている。

家具づくりには、素材の特性を見極め、構造を理解し、デザインと機能の両立を図る力が求められる。家具づくりの過程で得られる達成感や課題解決の喜びは、ものづくりに関わる人々を惹きつけ続けている。趣味や職業にとどまらず、生きがいとして家具づくりに没頭する人々の姿は、夢中になることが自己実現や他者との関係構築にもつながることを示している。

家具づくりは、木材という自然素材の魅力と、人間の創造性や感性が交差する場である。自然との接点が希薄になりつつある現代において、木を扱う行為の価値を見直すことが、森や自然に夢中になれる社会の構築に向けた確かな一歩となる。

2 木と人をつなぐ仕組み：地域資源・制度・文化

【2-1 地域資源としての広葉樹】

人が木材に能動的に関わる背景には、制度・文化・地域資源が支える重層的な基盤がある。筆者の暮らす東北地方は、ブナやミズナラを中心とした広



写真 2. 秋田県で入手可能な広葉樹材の一例

葉樹林が広く分布し、冷涼な気候と急峻な地形に適応した生態系が長年にわたり維持されてきた。これらの森林は、戦後の拡大造林で形成された針葉樹の人工林とは異なり、原木市場では20樹種以上の広葉樹が見られることも珍しくない(写真2)。自然更新や里山的管理によって育まれた結果、地域性豊かで個性ある木材が多く存在し、色調や木目、強度、加工性などに多様な特性を備えている。一方で、広葉樹林は針葉樹人工林のような計画的な経営が難しく、林産業としての展開には制限が多い。そのため広葉樹材は、用途の限定や規格の不統一、流通・加工体制の不備などから未活用または低利用の状態が続いてきた。木材の総需要に対する製材や合板向け利用は数パーセントにとどまり、大半がチップや燃料として消費されている^[1]。

【2-2 制度による後押し】

このような状況を踏まえ、近年の国の政策では広葉樹資源の活用に向けた明確な方向性が示されている。林野庁による「里山広葉樹利活用推進会議」では、未利用資源を地域振興の原資へと転換するプラットフォームの構築が提言され、サプライチェーン再編を視野に入れた議論が進められた^[1]。また、

「脱炭素社会の実現に資する等のための建築物等における木材の利用の促進に関する法律」^[2]や「グリーン購入法」^[3]なども、広葉樹を含む地域産材の活用を後押しする仕組みとして位置づけられている。

以上の制度は全国共通の枠組みであるが、その成果は地域ごとの実践に依存する。地方自治体では、木材利用推進条例や木育を含む教育プログラムの整備などが進められ、地域主導の取り組みが拡大している。制度の存在は、木材利用の正当性や社会的信頼性を高め、多様な関係者の参画を促す土台となっている。地域内の素材生産・製材・家具製作・内装施工・デザインなどが緩やかにつながるネットワークも形成されつつあり、各地で地元材によるブランド化や、多品種・少量生産に対応した加工体制の構築が進んでいる。飛騨市の広葉樹活用推進コンソーシアムや旭川家具工業協同組合のように、国産広葉樹の利用へと舵を切る事例も出てきた。秋田県では木工職人の集まりである「ORAE」(写真3^[4])が発足し、産官学連携による広葉樹利活用

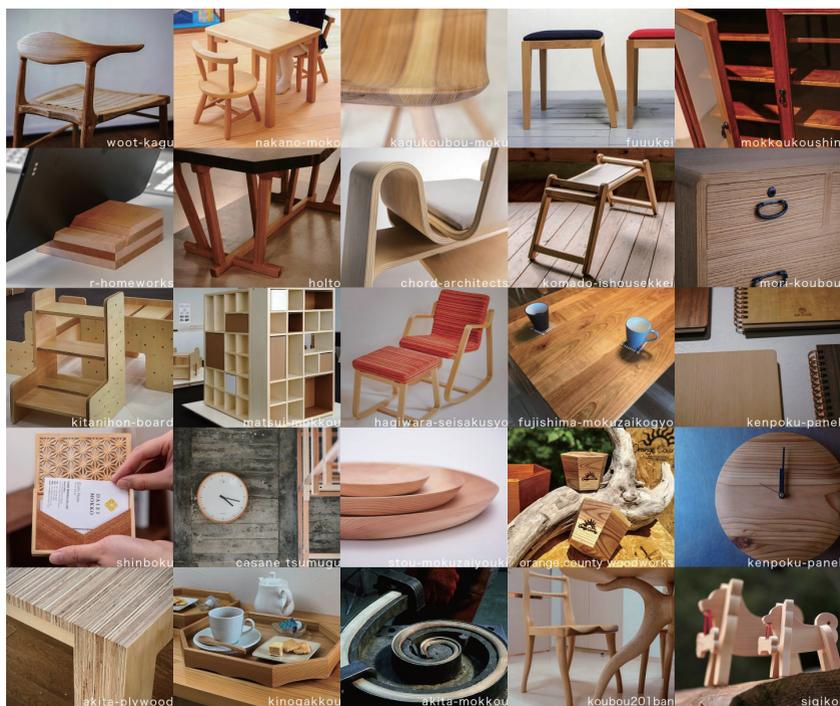


写真3. ORAEに集う作り手によるアキタファニチャー(出典:ORAE“ORAEについて”^[4])

の展開が加速している。

広葉樹は材ごとの特性差が大きいいため、個々の材質に応じた設計・加工・流通の知見が不可欠である。工業製品に求められる均質性とは異なる価値軸として「不均質性」を捉え、それを活かす審美眼と柔軟な設計力が求められる。取り組みを下支えするのが、制度的な後押し、文化的な土壌、地域に根ざす担い手の存在である。国産早生樹や小径木の活用、広葉樹の材質特性の把握など、新たな木材利用に向けた研究開発も進展している^[5]。

【2-3 木工文化の継承と進化】

制度や地域資源を活かすには、文化の土壌も欠かせない。全国各地には、曲げ物（曲げわっぱ）、桶樽、漆器、指物などの伝統的な木工技術が存在し、自然との関わりや素材に対する敬意が生活の中に根付いてきた。これらの工芸品は、使い手との関係性の中で価値を増していく生活道具であり、単なる製品ではない。伝統文化は現代的な感性和融合し、国内外のデザイナーとの協働や、体験型ワークショップによる人材育成・交流事業などを通じて進化を続けている。木材は、情報や感性を媒介する「物語のあるメディア」としての位置づけも持ち、創造性や共感を育む起点となっている。

多様な森林資源、制度的支援、文化的実践が重なり合うことで、人は木材との関係を受動的な消費から能動的な創作へと転換する。木を使いたいと思える環境、使い続けたいと感じられる技術、そして木を通じてつながりたいと思える文化的土壌がある地域には、森や自然に夢中になれる社会を先導する潜在力が備わっている。

3 創作を通じた夢中の連鎖: 伝統・技術・空間

木材という素材の魅力は、扱う過程で生まれる創造の面白さにある。特に家具づくりは、木の特性に向き合いながら形を整える工程を通じて、深い集中と探究を引き出す。そこには、「夢中になること」が何度も立ち上がる仕掛けが内在している。その熱中はやがて、家具というスケールを超えて、空間・建築・モビリティへと広がり、より大きな創造の領域へと展開している。

伝統工芸の分野では、木の性質に即した加工技術が長年にわたり蓄積され

てきた。曲げわっぱや木桶、漆器、指物などの製品には、木目や色調、生育中の幹の曲がりやねじれなど、素材の個性の見極めを含んだ素材に対応する高度な総合技術が求められる。近年では、これらの知見は、CNC加工やレーザー加工といったデジタルファブリケーション技術と接続され、新たな創造の可能性を切り拓いている。従来は職人の経験に依存していた造形も、デジタル環境で再現可能になり、複雑な形状や精緻な構造を誰もが扱える時代が到来している。木材特有の温かみや不均質性も、デジタル加工によって損なわれることなく、新しい表現として再評価されつつある。

大学や地域工房でも実践が広がっており、木工と先端技術の融合によって新たな学びの場が形成されている。例えば、地域材を用いた椅子づくりのワークショップでは、木育とものづくり教育を兼ね備えた体験型学習の場が提供されている^[6]。これらの創作体験は、木育や身体感覚とデータ処理の両方に支えられた総合的なプロセスであり、夢中を生み出す強い動力となる。

家具づくりで椅子やテーブルなどを製作する過程は、同時に空間の使い方や居心地の質に目を向ける行為でもある。家具は単体で完結せず、設置環境との関係性の中で機能し、意味を持つ。そのため、素材選定や形状、寸法の検討は、空間全体の構成に直結し、居住性や体験価値を左右する要素となる。このような空間的視点は、建築の領域にとどまらず、車内空間などモビリティにも波及しつつあり、株式会社天童木工や株式会社ミロクテクノロジーは、家具や木工で培った高度な技術を生かし、木製ステアリングやシフトノブなど、車両のインテリアパーツの製造に携わっている。さらに、株式会社トヨタ車体では木粉とバイオ由来樹脂を複合した「TABWD® (Toyota Auto Body Wood)」が開発され、自動車部品への実装が進んでいる。以上のように、機能と感性の両立、そして環境負荷の軽減といった観点から、木材の価値が新たに再評価されている。

木材利用の可能性は、建築分野にも広がりを見せている。展示空間や公共施設では、移動性や再構成のしやすさ、触感の良さに優れたモジュール什器や可変型の木質パネルが導入されており、空間デザインの質を高めている。木製のプロダクトは、空間の構成要素であると同時に、利用者の体験を豊かにする装置ともなっている。

近年では、接着剤を使用せず、木ダボのみで板（ラミナ）を接合する



写真4. DLT 木製家具 (Akitasugi DLT Furniture)

DLT (Dowel Laminated Timber) と呼ばれる構造材にも注目が集まっている。DLT は、家具製造で培われた加工技術と建築技術の接点に位置し、簡便で再構成可能な構造体として仮設住宅にも導入され、能登半島地震の被災地での事例は、ウッドデザイン賞 2024 の最優秀賞（国土交通大臣賞）に選出されている^[7]。DLT はスモールスタートできるローテクでローコストな材料のため、地域の針葉樹からラミナを作り、地域の広葉樹から木ダボを作り、地域の木工会社で DLT 製品を作ることも可能である。秋田県では地域産 DLT 家具の開発を通じた、地域での新たな創造の連鎖に取り組んでいる（写真 4）。

モビリティや空間、地域といった広がり背後には、木製の家具づくりという一つの行為がある。素材に向き合い、形を探り、手を動かしながら没頭する体験が、創造の起点となる。こうした個人の夢中は、新たな製品や技術の着想につながり、やがて体験の質を変え、社会に共有される価値を生み出していく。

結論:家具づくりが育む森との共創社会

「森や自然に夢中になれる社会をつくるためには？」という問いは暮らしの構造や社会の価値観を問い直す試みでもある。本稿では、木材利用、特に家具づくりを切り口に、森と人とのつながりに向き合った。

家具づくりに夢中になるという現象は、単なる趣味や職業という枠にとどまらず、森と日常生活を接続する感覚的かつ創造的な体験である。そこには、自然素材である木を扱うことに伴う手触りや香り、経年変化への愛着といった感性と、自らの手で「形にする」ことの充実感が重なり合っている。夢中の背景には、森という資源の存在、制度的な支援、文化的な継承といった土壌がある。さらに、家具づくりという創作から延長し、空間・建築・モビリティ・地域へと接続され、より広がりのある実践へと進化する可能性があり、新しい取り組みも認められる。

また、家具づくりに代表される木のものづくりを支える制度や支援の仕組みも重要である。木育の推進、森林環境譲与税や木材利用促進法などの制度的支援は、個人や団体の夢中を持続可能にし、社会的に展開するための土台を提供している。制度は、夢中になる人々を対象にするのではなく、彼らの活動を包摂し、持続的に広がる「ゆるやかな場」として機能する必要がある、支援組織やネットワークの存在も重要になるであろう。

研究と技術の存在も営みを次のステージへと導くためには重要である。多様な樹種特性への理解や、木材や木質材料の力学性能の向上や新たな機能性の付与のための開発とそれらを活かす構造設計、家具からモビリティ・空間・建築への応用など、技術シーズと実社会との接続が進む取り組みは、開発者を夢中にさせつつ、「古くて新しい産業」として森林・木材利用を再編する動きになり、地域から世界へと展開し得る可能性を秘めている。とりわけ、森林が豊かな地域は、森林資源と技術的蓄積、人材、自然との共生文化という多くの要素を有しており、夢中が交錯し共創が起こる場としての潜在力を備えている。研究者・職人・教育者・企業・行政・市民といった多様なプレーヤーが、それぞれの立場から森や木材と関わることで、豊かな社会・産業・暮らしが協働的に築かれていくことが期待される。

「森や自然に夢中になれる社会」とは、単に自然を愛でる人々が増えることではない。森の恵みを実感し、木とともに暮らすかたちをつくり、人とのつながりを育む営みが、日常のなかに当たり前のように根付いている社会である。とりわけ家具づくりは、素材に向き合い、空間と関係を結びながら、生活に寄り添うかたちを生み出す営みとして、森と暮らしの接点を担ってきた。そうした家具づくりの実践が各地で積み重ねられ、夢中を生み出しながら、豊かな社会の土壌を育てていこう。

[引用文献]

- (1) 林野庁(2025). 里山広葉樹利活用推進会議「里山広葉樹林の利活用を通じた再生に向けての提言」. <https://www.rinya.maff.go.jp/j/keikaku/kouyouzyu.html> (2025年10月アクセス)
- (2) 林野庁(2025). 脱炭素社会の実現に資する等のための建築物等における木材の利用の促進に関する法律. <https://www.rinya.maff.go.jp/j/riyou/koukyoukenchiku/index.html> (2025年10月アクセス)
- (3) 環境省(2024). グリーン購入法について. <https://www.env.go.jp/policy/hozen/green/g-law/> (2025年10月アクセス)
- (4) ORAe(2025) ORAeについて. <https://orae.jp/about/> (2025年10月アクセス)
- (5) 杉山真樹(2025) 早生樹等の国産未活用広葉樹材を家具・内装材として利用拡大するための技術開発. 木材情報, 411, 6-10.
- (6) 水谷晃啓, 辛島一樹, 江上史都, 村松尚人(2019). 体験型モノづくりワークショップを通じた行政主導型 Fab 施設の活用事例報告, 日本建築学会技術報告集, 25(59), 309-314.
- (7) ウッドデザイン賞 受賞作品データベース. DLT 恒久仮設木造住宅. (2024). <https://www.wooddesign.jp/db/production/2101/> (2025年10月アクセス)